



仕事としての研究の難しさ

味の素株式会社の荒川哲大さんからバトンを引き継ぎました。産業技術総合研究所の宮下振一と申します。2011年の入所以降、国家計量機関である同研究所計量標準総合センター（NMIJ）にて、化学計測の信頼性確保を支援する研究活動に取り組んでいます。30代も半ばを迎え、所帯を持つ研究者として9年を経た今、組織における中堅研究者としての活躍に対する期待の高まりを感じる中で、仕事としての研究の楽しさ・やりがいを感じると同時に、時折難しさも感じています。研究の楽しさ・やりがいについては言わずもがなであるため、本エッセイではあえて、今感じている難しさについて書いてみたいと思います。

一つ目は、研究と家庭の両立の難しさです。もちろんこれは研究に限った話ではなく、所帯を持つ社会人が多かれ少なかれ感じることだと思いますが、こと研究においては、そもそも時間がいくらあっても足りないという研究活動の特殊性が強く影響していると感じます。私は2011年2月の結婚を機に所帯を持ち、3人の子宝に恵まれました。家族で過ごす時間は私にとって掛け替えのないものであり、人生に活力と安らぎを与えてくれていると感じます。その一方で、子どもの保育園への送迎や急病への対処などは、研究活動を時間的に大きく制限します。そもそも時間がいくらあっても足りない研究活動に対して更に時間的制限が加わるわけですので、ストレスが生じるのは当然かもしれません。大学時代の唯一の趣味であったバイクの走行で例えるならば、休日平日、昼夜問わず研究に没頭する生活が許された大学時代はトップギアで疾走していたのに対して、子どもの送迎時間などを気にして時計とにらめっこする今は低速ギアでエンジブレキを使いながら運転している感覚です。もちろんこのストレスを言い訳にせずに、上手に対処しながら着実に研究成果を上げ続けることが重要であることは言うまでもありません。その一方で、一度しかない自分の人生を豊かにしてくれる家族との時間も大切にしたいと思う今日この頃です。

二つ目は、チームでの研究の難しさです。研究は個人で行う場合とチームで行う場合に大別できますが、それぞれに利点と欠点があると思います。私の場合、大学時代は前者に近い状況でした。出身大学である東京薬科大学では、ヒ素研究の第一人者として活躍された故貝瀬利一教授の研究室にて、光合成微生物におけるヒ素代謝機構の研究に没頭しましたが、この研究室は多忙を極める教授、学部生及び大学院生で構成される常時5~10人程度の小さな研究室であり、大学院生は基本的に一人一人が独立した研究テーマを持っていたため、日々の生活は孤独との戦いでした。そのため、当時は、チームで研究している同期の友人を羨ましく感じていました。その反動もあってか、産総研入所後は、チームで研究を行いたいと強く思っていました。しかし、所属した環境標準研究室は、各人が独自の研究を展開していたこともあり、研究室自体がワンチームの感覚で運営されていなかったため、思い描いていたチームでの研究は難しそうに思えました。それでも諦めずに周囲の研究者への自分



写真 左が木下さん、右の坊主頭の若造が私です。

なりのアピールを続けていたところ、所属研究室とは別に、研究室の垣根を超えた少数精鋭チームの一員に加えていただくこととなり、念願のチームでの研究がスタートしました。現在も継続しているこのチームでの研究は、自分一人では到底考えもつかない発想との出会いの連続であり、研究者としての私を大きく成長させてくれていると感じます。その一方で、経験豊富な研究者の発想に今後も頼り続けてよいかどうか自問自答を繰り返しているのも事実です。チームで得られた研究成果は、それに貢献したチームの構成員一人一人にも帰属すると頭では理解していますが、心のどこかでは、その研究を発想した人に大半が帰属するのでは？という思いがあるからなのかもしれません。このことは、良く言えば研究者としての自覚が芽生え、他者の発想に頼らずに、自分の発想を具現化することに挑戦したいという欲求が強くなってきていることの表れなのかもしれません。人生は一度きりであるからこそ、悔いが残らないように挑戦したいと思う今日この頃です。

以上、30代の一研究者が最近感じている仕事としての研究の難しさについて書いてみました。いずれも自分が研究者として成長するためにぶつかるべき壁と捉え、前向きに対処していきたいと思っています。最後に、大学時代の研究室の先輩である木下健司さん（東京都立産業技術研究センター）に本エッセイのバトンを渡したいと思います。写真は、当時、生命科学部研究棟の最上階（12階）にあった院生室にて、私が木下さんから助言を頂いている（と思われる）時のものです。大学院時代の木下さんは昼夜逆転の生活を送られていたため、学部生の私にとっては伝説上の人物でしたが、大学院進学後は顔を合わせる機会が増え、液クロや質量分析法のイロハをはじめとして、プレゼンのコツ、英語の重要性、立川流落語や西部邁ゼミナールの面白さなど様々なことを教えてもらいました。木下さん、よろしくお願ひします。

〔国立研究開発法人産業技術総合研究所 宮下振一〕